



今月は、世界理解月間です。

1905年2月23日この記念すべき日は、ポール・ハリス、ガスターバス・ローア、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレーの4人がシカゴで初めて会合を開いた日で、ロータリーの創立記念日になっています。

そこで、2月は「世界理解月間」(World Understanding Month)であり、この月間中ロータリークラブは、世界平和に不可欠なものとして、「理解と善意」を強調するクラブ・プログラムを行うよう要請されています。

また、2月23日の創立記念日は、世界理解と平和の日(World Understanding and Peace Day)と定められており、各クラブはこの日、国際理解と友情と平和へのロータリーの献身を特に認めることとし、強調することになっています。

さらに、2月23日から始まる1週間を「世界理解と平和週間」と呼び、ロータリーの奉仕活動を強調することを決議しています。

さて、RI第2680地区パスト・ガバナー、元RI会長代理 深川純一氏は、自身のブログの中で「国際奉仕」「国際理解」についてこう述べておられます。国際奉仕論の論点について、①国家間の利害が対立する時は、力の行使をもって解決しようとし、これが戦争です。このような国家間の利害の対立の中で、個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践類型を国際奉仕といいます。②新しい問題として南北問題が出て来ました。ロータリーはこの問題に対するロータリアン個人の善意の働きかけの分野を1962年、世界社会奉仕WCSと呼びました。③ロータリーは、国際奉仕のニーズを解決する方便の問題として

ロータリー財団という制度を作り上げ、それは今日、立派な仕事をしています。

さらに「国際奉仕の本質」について、ロータリーは、1921年個人の善意の世界に立って、地球上の全ての人達を善意で繋いでいく運動としてロータリー運動を捉えようと考えました。

戦争の有無に拘わらず、一人一人のロータリアンが人と人とを善意で結ぶという考え方で、国際社会の全ての人達とお付き合いをした時に、ロータリー運動に、もし力があれば国際的な理解と親善と平和を保障することが出来ると考えたのであります。

この国際奉仕の決議はまさに初期ロータリーの原理の集大成のハイライトの一つとして宣言せられるに至ったのであり、これが今日の国際奉仕の意味する全てのものであることを理解しなければならないのであります。

これは永遠不変の原理の宣言であり、どんなに時代が変わろうとも国際奉仕の実践としては「個人の善意と善意」を結ぶこと以外のものはないと言わなければならないのでありますと結んでおられます。

現在、世界の中では今なおポリオ等の健康問題、貧困、災害、戦争等の問題が起こっています。私達が出来ることは直接手を下すことは少なく、個人の善意、すなわち奉仕を通じて解決を計ることが求められます。

昨年3月11日に起こった東日本大震災における日本国内のみならず、世界各国からの人・物の援助活動を受けたことは記憶に新しいところです。

世界理解月間にあたり、今一度世界に目を向けてロータリーの奉仕活動を考えてみましょう。

合掌